

# 情報社会学科卒業生の学修成果とキャリア

## —web システムによる卒業生調査の結果を中心に—

江藤智佐子・石橋 潔・遠山 潤・堂前亮平  
中西吉則・原岡 薫・白石義郎

## Learning Outcomes and Career of Graduates of Information Sociology:

— Focusing on Results of the Web Tracer Study System —

Chisako ETO・Kiyoshi ISHIBASHI・Jun TOHYAMA・Ryouhei DOUMAE  
Yoshinori NAKANISHI・Kaoru HARAOKA・Yoshiro SHIRAIISHI

**【要約】**本研究は、学科設立から10年を迎えたのを機に、学科教育の評価者でもありサポーターでもある卒業生を対象とした悉皆調査を行うことで、学科教育に対する点検・評価、IR活動の一環として今後の学科教育の改善を検討することが目的である。調査方法は、卒業生に調査依頼状とweb回答が可能な個別IDとパスワードを発行し、各自が回答を行うwebシステムによるアンケート調査を実施した。

調査の結果から、在学時の学修状況としては、授業には真面目に出席しているが、授業外での学習はほとんど行っておらず、学科の教育・指導で充実していたと評価しているものは、「専門の授業」や「卒業論文」、「ゼミ活動」であり、自分が熱心に取り組んだ活動も「卒業論文」、「専門の授業」、「ゼミ活動」であった。卒業後の進路は、約9割が就職をしており、約8割が正規雇用として就業していた。その中で、初職を継続している者は約6割であった。在学時に獲得した能力では「PCを活用する能力」であるが、現在の仕事で必要とされている能力は、知識や技能ではなく「基礎的・社会的な技能」や「統合的な学習知識と創造的な思考力」などの能力であった。大学教育での効用としては、人格を形成する上で重要だったと考えており、78.9%の卒業生が総合的に振り返って学科教育に満足していると回答していた。

**【キーワード】**情報社会学科、卒業生調査、学修成果、初期キャリア、学生のエンゲージメント

## 第1章 研究の背景と目的

### 第1節 研究の目的

本研究は、学科設立から10年を迎えたのを機に、学科教育の評価者でもあり、サポーターでもある卒業生を対象とした悉皆調査を行うことで、学科教育に対する点検・評価、IR活動の一環として今後の学科教育の改善を検討することが目的である。

卒業生調査は、外部調査機関等に委託した調査分析の方が教員の負担は少ないが、IR活動という観点においては、自校の調査・分析を所属教員自らが行うほうが、より教育改善につながるものと考えられる。

本調査は、学科の今後を検討する上で、卒業生調査の結果を分析することで得られた知見をもとに、入試制度の改革ならびに学科教育の改善につながる基礎資料の作成という点においても意義あるものである。

## 第2節 情報社会学科10年のあゆみ

情報社会学科は、2002年に前身の人間科学科が心理学科と情報社会学科に改組され、2012年で10周年を迎えた。2015年に学生制作による『久留米大学文学部情報社会学科 It's vol.2<sup>1)</sup>』において作成された学科10年史が図表1である。

学科のコンセプトは、「社会の変化を捉え、人と人とを情報で結ぶ」である。学科の3つのポリシーは、「アドミッション・ポリシー：情報社会学科では、『情報を集め、分析し、発信する』ための基礎的能力を持っている人、他のメンバーと協力して課題の解決を遂行していく基礎コミュニケーション能力がある人を求めています」、「カリキュラム・ポリシー：『情報を集め、分析し、発信する』能力を養成します。情報を生み出す社会の構造を多方面から学び、情報社会への問題意識を啓発します。情報スキルと情報リテラシーをすべての学年において学びます」、「ディプロマ・ポリシー：現代社会が生み出す膨大な情報を収集し、解析し、自らも発信するための高度な情報活用技術を身につけ、さらに社会科学諸領域から得られる多様な観点の下に理論的・実践的に社会調査を学ぶことで、人間や社会に対する広汎で体系的な理解力と、社会が抱える諸問題の解決に必要な総合的判断力を備え、地域社会に貢献できる指導者を養成します」となっている。

学科設立当時から、社会調査の実習演習科目を必修科目としてカリキュラムに配置し、2004年には2回生全員がポスターセッションによって調査結果を発表する「社会調査実習演習合同発表会」を学科の定例行事として開始した。この合同発表会は、現在も毎年12月に実施しており、1年間の実習演習での活動成果を発表し、参加者からの投票によって、ゼミ別の順位を競う形式をとっている。

また同年（2004年）には、FMラジオのスタジオを学内に開設し、翌年から「放送制作実習演習」という授業科目の中でラジオ番組制作の授業が始まった。

図表1 情報社会学科10年のあゆみ



2006年には、「活字メディア実習演習」も始まり、フリーペーパー『GABA』創刊号を授業成果として発行するようになった。

2008年には、卒業論文の質を向上させる取り組みとして、卒論提出者全員がその成果を発表する「卒業論文発表会」が始まった。

2013年には、授業以外のプロジェクトワークとして、社会調査で培ったインタビュー調査の技術を駆使し、職業キャリアを意識した学生目線の学科紹介ブックレットである『It's vol.1』が創刊された。そして、2014年には2回生が中心となってオープンキャンパスを企画・運営する「プロジェクトAR」を実施した。

このように、情報社会学科においては、学生が主体となって課題解決を行うPBL形式のアクティブラーニングを授業や授業外で積極的に進めてきたのである。

### 第3節 研究の方法

卒業生調査は、web調査システムを用いて実施した。このweb調査システムは、2つの科研費（①科学研究費基盤研究A・課題番号25245077「キャリア・職業教育による高等教育の機能的分化と質保証枠組みに関する研究」（平成25～29年度、研究代表 吉本圭一・九州大学）、②科学研究費基盤研究B・課題番号23330246「大学から職業への移行を促すインターンシップを軸としたキャリア教育研究」（平成23～25年度、研究代表 椿明美・札幌国際大学短期大学部）によって開発されたものである。この2つの科研費で開発されたweb調査システムは、地方私立大学向けに作られたものであり、卒業生の初期キャリアと在学中のエンゲージメントを探求できる調査設計になっている。また、調査設計段階で、参加機関の卒業生の職種、業種など本学科の特徴に沿ったカスタマイズ項目を選ぶこともできた。

回答方法は、事前に卒業生に送付した調査依頼状によって個別のIDとパスワードを連絡し、卒業生が指定のwebサイトにアクセスするものである。各自のIDとパスワードによってシステムにログインすることで、自記式回答ができる。仮にIDとパスワードを忘れた場合は、回答開始前に記入した問い合わせ用のアドレスからシステム会社に問い合わせ、再度IDとパスワードを発行してもらう形をとった。このように直接、本学科の教員が問い合わせに関与しない形式をとることで、卒業生は個別回答内容を教員に知られることなく、自由な意見を記述することが可能になった。

### 第4節 調査概要

#### 1. 調査の目的

調査の目的は、学科開設10年目の節目として、学科教育のラーニングアウトカムの検討を行うことである。卒業直後から9年目までの10年間を初期キャリアとし、大学教育の評価者として、またステークホルダーとしての卒業生からみた在学時の教育・学習経験に対する点検評価を行うことである。また、調査結果を学科教員間で検討することで、今後の教育改善やカリキュラム検討、さらにIR活動に結びつけていくことを目指している。

#### 2. 調査対象

人間科学科の卒業生、そして情報社会学科卒業生を合わせると、2013年度卒業生で10回の卒業生を送り出すことができた。そこで、情報社会学科の教育内容の点検・評価を検証するために、卒業直後（卒後0年）から卒後9年目までの卒業生全員を調査対象とした。具体的には、

調査時点での卒業直後(2013年度卒)から卒後10年目(2004年度卒)までの学科卒業生全員である。また、本調査を実施するにあたっては、卒業生への連絡等において文学部同窓会に多大な協力をいただいた。

### 3. 調査方法

調査方法は、卒業生に調査依頼状と web 回答が可能な個別 ID とパスワードを調査開始の2週間前を目安に発送した。卒業生に送付したアンケート依頼状は、図表2に示すとおりである。

手元に届いたアンケート調査依頼状には、web 調査システムの URL、そしてスマートフォンで回答できるための URL にアクセスできる QR コードを記載した。この URL にアクセスし、卒業生本人が各自発行された個別の ID とパスワードを用いて web 調査システムにアクセスし、30分程度のアンケートに回答する方式である。事前に在学生在にプリテストを行ったところ、パソコンでの回答よりも、通勤時間や空き時間などを用いて回答できるスマートフォンでの回答が便利だとの意見が多かった。そのため、スマートフォンでの回答も可能な調査システムの依頼を行った。これにより、パソコンとスマートフォンのどちらでも回答できるサイト設計となったが、回答者の回答状況を調べたところ、本学科の回答者全員がスマートフォンで回答を行っていた。具体的な web 調査の回答の流れを示したのが図表3である。

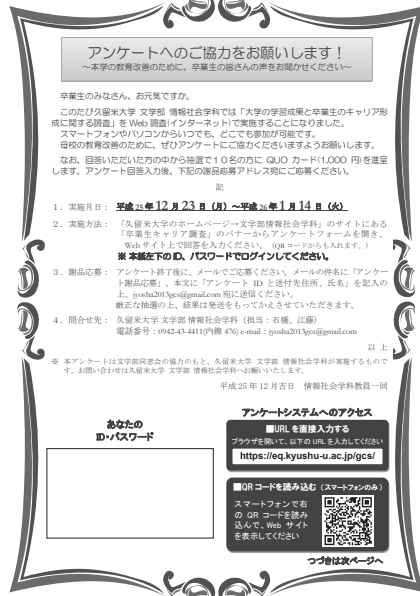
卒業生に対し、調査回答を依頼する発送は、計4回行った。1回目の発送は web 調査開始2週間前の2013年12月に依頼状を発送した。その際、学科の現在の教育活動を卒業生にも発信するために2012年度の文学部中央研究費の助成を受けて制作した学生制作物のキャリアガイドブック「It's vol.1」も同封した。

2回目の発送は、回答締め切り前に年賀状を用いて卒業生に回答依頼をおこなった。図表4に示すように、年賀状には当時の先端技術であった AR (Augmented Reality : 拡張現実) を組み込み、学科のプロジェクトワーク<sup>2)</sup> についてのアピールも行った。

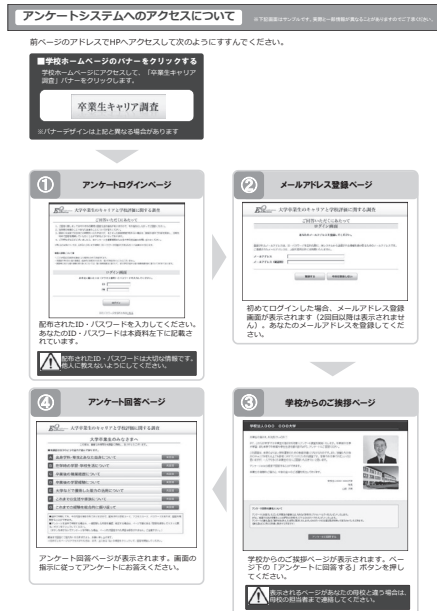
3回目の発送は督促1回目であるが、web システムの不具合が生じたため、最後のG項目に

図表2 アンケート調査依頼状

久留米大学 文学部 情報社会学科 卒業生の皆様へ



図表3 web アンケートシステムの流れ



2問（G3,G4項目）の追加設問を加え、全員に再回答を促す依頼状を2014年2月10日に発送した。

4回目の発送は、未回答者には2回目の督促を、回答者には回答礼状を2014年4月25日に発送した（図表5）。その際、毎年5月に開催される文学部同窓会への案内を記載したところ、その年の同窓会への情報社会学科卒業生の参加率が高くなり、卒業生調査を通じて卒業生と直接交流を再開するきっかけにもなった。

4. 調査概要

調査期間は、2014年12月24日から2015年7月1日までである。

発送数（ID発行数）は578、回答数は144、有効回答数は135、有効回答率は24.4%であった。

調査概要を示したのが、図表6である。

図表6 調査概要

調査時期	2013年12月～2014年7月
調査方法	Web調査
調査対象	卒後0年～9年
発送数（ID発行数）	578
回答数	144
有効回答数	135
有効回答率	24.4%

主な調査項目は、（A）～（G）の7項目群から構成されている。

- (A) 出身学部・学科とあなた自身について
- (B) 在学時の学習・学生生活について
- (C) 卒業後の職業経歴について
- (D) 卒業後の学習経験について
- (E) 大学などで獲得した能力の活用について
- (F) これまでの生活や家族について
- (G) これまでの経験を総合的にふりかえって

5. 回答者の属性

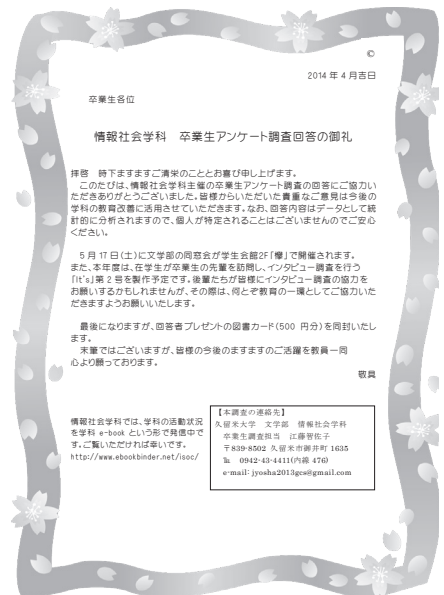
回答者の属性を性別で示したのが、図表7である。男性が36.4%、女性が63.6%と学科の男女比が男性6割、女性4割程度であることから、本調査の回答者は、女性の方が多く回答していることになる。

さらに、卒年別の回答状況を示したのが、図表8である。各年度別に見ると、回答年度のば

図表4 アンケート調査督促1回目ハガキ



図表5 アンケート調査協力の礼状



らつきが見られるが、「卒後3年まで」、「卒後4-6年」、「卒後7-9年」と再カテゴリー化すると、「卒後3年まで」の回答者が46.3%と最も回答率が高く、次いで「卒後4-6年」の31.3%、「卒後7-9年」の22.4%と卒業年数が経つにつれ、回答率が減少していることがわかる。

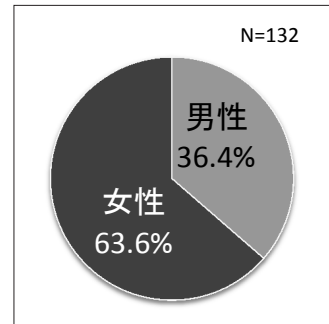
本稿では、卒年別の違いをみるために、再カテゴリー化した3分類（「卒後3年目まで」「卒後4-6年」「卒後7-9年」）を主な分析で用いることにする。

次に、インプット変数として、中学3年時の成績と高校時代の在籍学科を見てみたい。中学3年時の成績を示したのが図表9である。情報社会学科に入学してくる学生は、中学時代の成績は「上位」であったものが53.9%であり、成績「上位」と「中位（33.0%）」をあわせると約8割の学生が、中学時代の成績が「中位」以上であったことがわかる。

また、図表10に示すように、高校時代の在籍学科を見ると、「普通科」の出身が81.7%と最も多かった。職業教育のプログラムを受けてきた「専門学科」の卒業生は13.0%であった。

つまり、情報社会学科で学ぶ学生の多くは、中学時代の成績は「中位」もしくは「上位」の学力を持ち、高校時代に「普通科」の教育を受けてきた学生が入学してきていることがわかる。

図表7 性別



図表8 卒後年数別一覧

	(%)	(%)	n
卒後0年 (2012年度卒)	11.2	卒後3年まで	62
卒後1年 (2011年度卒)	12.7		
卒後2年 (2010年度卒)	14.9		
卒後3年 (2009年度卒)	7.5	卒後4-6年	42
卒後4年 (2008年度卒)	11.2		
卒後5年 (2007年度卒)	11.9		
卒後6年 (2006年度卒)	8.2	卒後7-9年	30
卒後7年 (2005年度卒)	13.4		
卒後8年 (2004年度卒)	4.5		
卒後9年 (2003年度卒)	4.5		
計	100.0		
n	134		134

図表9 中学3年時の成績

	(%)	(%)
5 上の方	14.8	上位
4	39.1	
3	33.0	中位
2	8.7	下位
1 下の方	4.3	
計	100.0	13.0
n	115	

図表10 高校時代の在籍学科

	(%)
普通科	81.7
専門学科	13.0
総合学科	2.6
その他	2.6
計	100.0
n	115

## 第2章 在学時の学修状況

情報社会学科の卒業生は、在学時にどのような大学生活を送っていたのだろうか。本章では、学生のエンゲージメントについて、学習状況、授業への取り組みを中心に検討していきたい。

### 第1節 授業への出席状況と学習時間

授業への出席状況を示したのが、図表11である。約7割の学生が授業に「ほとんど出席」(68.9%)していた。半期15回授業のうち3回以下の欠席(「欠席は1/5」)だった者は、21.3%であった。つまり、約9割の卒業生は、在学時にはほぼ欠席することなく授業に真面目に出ていたようである。

図表11 授業への出席状況 (%)

	ほとんど出席	欠席は1/5以下	欠席は1/4くらい	欠席は1/3以上	計	<i>n</i>
授業への出席状況	68.9	21.3	8.2	1.6	100.0	122

では、授業への出席だけでなく、授業時間以外での自主的な学習にどれだけの時間を費やしていたのだろうか。授業以外での学習時間(授業期間中)を5段階評価で尋ねた結果を示したのが図表12である。「授業以外はほとんど勉強しない」(1+2)の回答は、49.2%であり、約半数の学生が、授業以外で勉強していなかった。

授業には真面目に出席しているものの、授業以外の時間を勉強に費やすことをあまりしないという学習傾向がうかがえる。近年、プロジェクトワークや卒業論文などの応用・発展科目において、単位は取得しているものの、授業で学んだ知識や技能が定着していない学生が多く見られるようになってきた。また、卒業単位においても成績上位者であっても124単位程度で卒業する学生も増えてきた。授業以外の時間を使って知識を深めようとする学生が少なくなったのか、自学自習する能力が低下したのか、さらに検討が必要である。

図表12 授業以外での学習時間(授業期間中) (%)

	5 授業以外でもほぼ毎日勉強していた	4	3	2	1 授業以外はほとんど勉強しなかった	計	<i>n</i>
授業以外の学習時間	6.6	11.5	32.8	26.2	23.0	100.0	122

授業への出席状況は良いが、授業以外であまり勉強していない学生たちの在学時の成績はどうだったのだろうか。在学中の成績を自己評価(5段階評価)で回答してもらった結果を示したのが図表13である。成績が上位(5+4)と回答した卒業生は、「卒業3年目まで」は30.9%、「卒業4-6年」は45.7%、「卒業7-9年」は、33.3%であった。「卒業4-6年」の卒業生の半数近くが成績「上位」であった。全体的には成績「中位」の卒業生がもっとも多いが、「卒業7-9年」の卒業生は、成績「下位」(1+2)が25.9%と、約4分の1が成績下位の卒業生の回答が見られる。

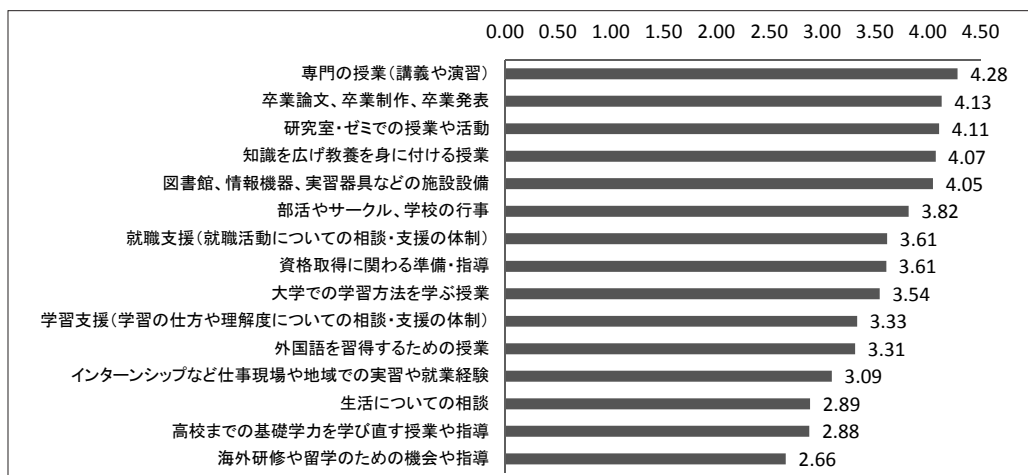
図表13 在学中の成績 (%)

	5上の方	4	3	2	1下の方	計	n
卒業3年まで	5.1	25.4	61.0	8.5	0.0	100.0	59
卒業4-6年	14.3	31.4	48.6	5.7	0.0	100.0	35
卒業7-9年	3.7	29.6	40.7	18.5	7.4	100.0	27
計	7.4	28.1	52.9	9.9	1.7	100.0	121

## 第2節 学生のエンゲージメント

卒業生は、大学教育にどのような印象を抱いているのだろうか。学科が提供する教育・指導の点検・評価として、「本学の教育・指導は充実していましたか」と5段階評価（5「とても充実していた」～1「全く充実していなかった」）で尋ねた結果を平均値で示したのが図表14である。

図表14 学科の教育・指導の充実（平均値）



最も充実していた教育・指導内容は、「専門の授業（講義や演習）」(4.28)であり、次いで「卒業論文・卒業制作、卒業発表」(4.13)、「研究室・ゼミでの授業や活動」(4.11)、「知識を広げ教養を身につける授業」(4.07)の順であった。

反対に最も低かったものは、「海外研修や留学のための機会や指導」(2.66)であり、平均値3以下だったものは「高校までの基礎学力を学び直す授業や指導」(2.88)、「生活についての相談」(2.89)であった。

学科の卒業生は、在学時に「専門の授業」や「卒業論文」やゼミ活動、「知識を広げ教養を身につける授業」を高く評価していた。学科では、1年次では「教養演習」、2年次では「情報社会実習演習」、3・4年次では卒論執筆のための「演習」と、在学中必ずどこかのゼミに所属する仕組みをとっている。特に2年次の「情報社会実習演習」では、ゼミでの1年間の調査活動の結果を発表し、ゼミ対抗形式のポスターセッションを行う「情報社会実習演習合同発表会」を行っている。ゼミの仲間と同じ目標に向かって活動し、グループワーク形式で成果をとりまとめる機会が設けられているのである。また、3・4年次の「演習」では、卒論が完成するまで、指導教員の指導を受ける体制が取られていることで、4年次が終了するまで指導教

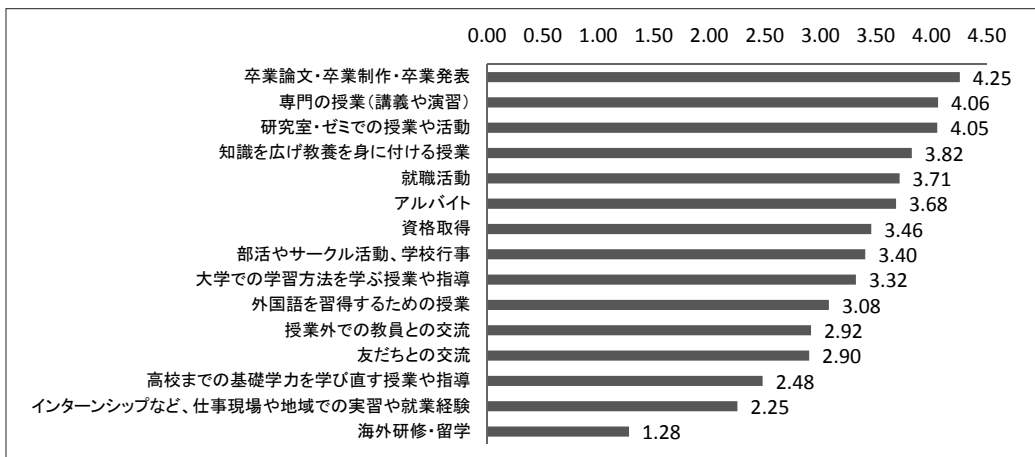


員からの指導が継続的に行われている。卒業論文の無い学部では、卒業単位を取得すると、4年次はほとんど学部学科の教育を受けない学生も見られるが、文学部では卒業論文が必修化されているため、卒業論文を提出し、その成果を口頭発表し、審査が終わるまで学科教育を受けなければならない。卒論ゼミである「演習」は、2年間同じ仲間と同じ目標に向かって活動する仲間づくりの場としての機能も担っているのである。

このように、卒業論文を学科の学びの集大成に位置づけ、それを支える授業科目に全学年ゼミを配置していることが、学科の教育・指導の充実として高い評価を得ているのではないかと考える。

では、学生自身は在学中にどのような学修に熱心に取り組んでいたのだろうか。5段階評価（5「熱心に取り組んだ」～1「熱心に取り組まなかった」）の平均値を示したのが図表15である。

図表15 熱心に取り組んだ教育内容（平均値）



学生が在学時に最も熱心に取り組んだ教育内容は、「卒業論文・卒業制作・卒業発表」(4.25)が最も高く、次いで「専門の授業(講義や演習)」(4.06),「研究室・ゼミの授業や活動」(4.05)の順であった。

反対に熱心に取り組まなかった学修は、「海外研修・留学」(1.28),「インターンシップなど、仕事現場や地域での実習や就業体験」(2.25),「高校までの基礎学力を学び直す授業や指導」(2.48)であった。

在学中、大学の授業よりもアルバイトに熱心な学生も多いというイメージがあるが、情報社会学科の学生は「アルバイト」(3.68)よりも卒業論文や専門の授業、ゼミ活動の方に熱心に取り組んでいたようである。

大学が提供する教育内容と本人が在学時に熱心に取り組んだ活動には、どこに差が生じているのだろうか。図表14と図表15の結果を本人の取組状況と大学教育の差として示したのが、図表16である。

大学が提供した教育内容よりも学生自身が熱心に取り組んだものは、「卒業論文・卒業制作・卒業発表」と「就職活動」であった。他の項目では、大学から提供される教育内容に対し、本人の取組みは高くないという結果になっていた。大学が教育・指導を行っても本人がその教育



型の授業への評価は「卒業3年まで」の卒業生が経験したことを実感していることがうかがえる。

### 第3章 卒業生の初期キャリア

幅広いカリキュラムで学んだ学科の卒業生たちは、どのような初期キャリアを歩んでいるのだろうか。本章では、初職と現職に着目し、卒業生の初期キャリアについて考察していきたい。

#### 第1節 大学から職業への移行状況

卒業直後の進路状況を示したのが、図表18である。卒業時点に就職・キャリア支援課によって進路状況調査が行われているが、情報社会学科の卒業生の就職率は毎年9割以上で推移している。図表18の結果からも、卒年にかかわらず約9割の学生が卒業後の進路が「就職」であった。

図表18 卒業直後の進路状況 (%)

	就職	進学	進学も就職もしていない	その他	計	n
卒業3年まで	91.2	1.8	7.0	0.0	100.0	57
卒業4-6年	91.9	5.4	2.7	0.0	100.0	37
卒業7-9年	92.3	3.8	0.0	3.8	100.0	26
計	91.7	3.3	4.2	0.8	100.0	120

#### 第2節 就業形態と初職の継続状況

では、卒業後の就業形態はどうだろうか。初職（卒業後初めて就いた仕事）と現職（現在の仕事）の就業形態を示したものが図表19である。

初職では「正規の社員・職員として勤務」が80.5%であったが、現職では79.2%と0.7ポイント減少しているが、約8割の学生が正規雇用として就業を続けている。この状況を卒年別に見ると「卒業3年目まで」と「卒業7-9年」では、初職より現職の方が正規雇用の割合が増えている。初職の段階では非正規雇用として採用された後に正規雇用へと就業形態が転換したのか、転職によって正規雇用になったのか、個別の追跡調査が必要である。

次に、初職の継続状況を見てみたい。初職の継続状況を示したのが、図表20である。全体

図表19 初職と現職の就業形態 (%)

		正規の社員・職員として勤務	契約・派遣などの非正規の社員・職員として勤務	自営業・家業の仕事に就いた	パートタイム・臨時などの仕事に就いた	その他	計	n
卒業3年まで	初職	83.9	12.5	0	3.6	0	100.0	56
	現職	85.4	14.6	0	0	0	100.0	48
卒業4-6年	初職	83.3	11.1	0	5.6	0	100.0	36
	現職	74.2	22.6	0	0	3.2	100.0	31
卒業7-9年	初職	69.2	19.2	7.7	3.8	0	100.0	26
	現職	72.7	22.7	0	0	4.5	100.0	22
計	初職	80.5	13.6	1.7	4.2	0	100.0	118
	現職	79.2	18.8	0	0	2	100.0	101

では、58.1%が初職を継続している。「卒後3年まで」は69.6%と約7割の卒業生が初職を継続している。「卒業4-6年」では51.4%と18.2ポイント減少し、「卒業7-9年」では42.3%とさらに9.1ポイント減少している。卒後3年以内に大学生の3割が離職すると言われている「七五三現象」が学科卒業生にも当てはまっているようである。

図表20 初職の継続率

	初職を続けている	初職は辞めている	(%)	n
卒業3年まで	69.6	30.4	100.0	56
卒業4-6年	51.4	48.6	100.0	35
卒業7-9年	42.3	57.7	100.0	26
計	58.1	41.9	100.0	117

では、初職を継続していない卒業生（「その仕事（初職）を辞めている」）は、現在までいくつの企業での仕事を経験しているのだろうか。初職を継続していない卒業生の転職回数を示したのが図表21である。「1社」は転職1回目を意味する。初職を継続していない卒業生は49名であったが、その全員が転職をしていた。経験した企業2社目（転職2回目）が55.1%と最も多く、次いで1社目（転職1回目）の24.5%であった。5社以上（転職5回以上）の経験を持つ卒業生も8.2%いた。

図表21 現在までの転職回数

	(%)
1社	24.5
2社	55.1
3社	8.2
4社	4.1
5社以上	8.2
計	100.0
n	49

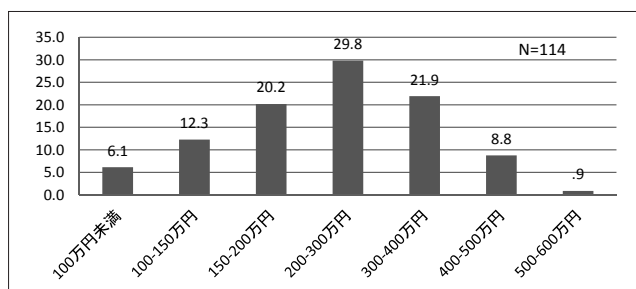
学科卒業生の約4割が転職を行っており、その約半数以上が2社の経験を持つ転職を行っていた。

### 第3節 現職の状況

現在の仕事で、どのくらいの年収を得ているのだろうか。現職の年収を示したのが図表22である。最も多い年収は、「200-300万円」の29.8%、次いで「300-400万円」の21.9%、3番目が「150-200万円」の20.2%であった。大卒初任給を約19万円として概算した場合、年収は約300万円程度となる。「卒後3年目まで」の回答者が約半数（46.2%）であることから、「200-300万円」の年収が多いのは、就業年数が短いことも影響しているものと考えられる。全体の傾向ではあるが、年収300万円以下の卒業生が68.4%と約7割近くとなっていることは、就業形態、企業規模、就業年数の何が影響しているのか、さらに検討が必要がある。

では、現在の仕事について卒業生はどの程度満足しているのだろうか。現職の満足度を示し

図表22 現在の年収



たのが図表23である。「満足（5 + 4）」の割合は、47.4%と約半数の卒業生は、現在の仕事に満足しており、「不満（1 + 2）」と感じている卒業生は、21.1%であった。卒業生の多くは、概ね現在の仕事に満足しているようである。

図表23 現職の満足 (%)

	5とても満足している	4	3	2	1とても不満である	計	<i>n</i>
現職満足度	12.3	35.1	31.6	15.8	5.3	100.0	114

#### 第4章 在学時の獲得能力と仕事での必要能力

学校教育においては、知識、技能、態度の育成が求められている。また仕事においては、厚生労働省が主体となり、中央職業能力開発協会が運営している「職業能力評価基準」においても知識、技能、コンピテンシーと知識、技能の習得に加え、コンピテンシーが仕事を遂行する上で必要であることが指摘されている。

大学教育において、知識、技能に加え、能力はどの程度育成できているのだろうか。

##### 第1節 在学時の獲得能力と仕事での必要能力

在学時に獲得した能力を「獲得度」として5段階評価（5「十分身につけている」～1「ほとんど身につけていない」）で、また現在の仕事で必要な能力を「必要度」として5段階評価（5「とても必要である」～1「まったく必要でない」）の平均値を示したのが図表24である。

ここでは、知識、技能、能力を比較検討するために、「基礎知識」、「専門的な知識」、「専門的な技能」、「基礎的・社会的な技能」、「統合的な学習知識と創造的な思考力」、「グローバルな能力」の6分野において、それぞれ対応する項目を尋ねている。

在学時に獲得した能力で最も高かったのは、「PCを活用する能力」(3.96)であった。これは、学科の必修科目にPC技術を習得する科目を配置していることや、「上級情報処理士」の資格取得を奨励するカリキュラム構成になっていることも考えられる。

次に、現在の仕事で必要な能力で高かったものは、「優先順位をつけて仕事を段取りする能力」(4.65)、「組織における自分の役割を認識し、チームに貢献できる能力」(4.56)、「取引先や顧客などに対するコミュニケーション能力」(4.37)など、「基礎的・社会的な技能」に関する能力が平均値4.0以上と、仕事での必要度が高いことが分かる。また、「基礎的・社会的な技能」の次に高い必要性を示していたのが「統合的な学習知識と創造的な思考力」に該当する能力（「知識を横断的に活用する能力」(4.18)、「新たなアイデアや解決策を見つけ出す力」(4.14)）であった。

つまり、現在の仕事では、知識や技能よりも「基礎的・社会的な技能」や「統合的な学習知識と創造的な思考力」などの能力の方が、必要性が高いことが分かる。

図表24 能力の獲得水準と仕事での必要水準 (平均値, 標準偏差)

項目		獲得度		必要度		(必要度-獲得度)	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
基礎的な知識	a	高校卒業程度の基礎的な知識	3.43	1.03	3.35	0.99	-0.08
	b	高校までの科目(国語, 数学, 英語, 地歴・公民など)に関する知識	3.10	0.94	3.08	0.79	-0.02
専門的な知識	c	経営や情報技術に関する基礎的な知識	3.12	0.93	3.59	1.24	0.47
	d	学際的な知識や考え方	2.98	0.87	3.21	1.18	0.23
専門的な技能	e	PCを活用する能力	3.96	0.95	4.22	1.09	0.26
	f	担当業務の課題を発見し, 具体的な解決策を提案する能力	3.35	0.94	4.24	0.86	0.89
基礎的・社会的な技能	g	優先順位をつけて, 仕事を段取りする能力	3.65	0.99	4.65	0.56	1.00
	h	組織における自分の役割を認識し, チームに貢献できる能力	3.54	0.90	4.56	0.82	1.02
	i	取引先や顧客などに対するコミュニケーション能力	3.42	1.10	4.37	1.06	0.95
	j	新しい知識や技術に対して自分で調べ, 継続的に学び続ける力	3.50	1.01	4.22	1.09	0.72
	k	論理的に物事を考える力	3.28	0.88	4.02	1.05	0.74
	l	プレッシャーの中で活躍する力	3.08	1.01	4.00	1.21	0.92
統合的な学習知識と創造的思考力	m	新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	3.18	0.99	4.14	1.00	0.96
	n	知識を横断的に活用する力	3.19	0.86	4.18	0.95	0.99
グローバルな能力	o	多文化, 異文化を理解し, 業務を遂行する能力	2.75	1.06	2.88	1.36	0.13
	p	外国語を用いて書いたり話したりする力	2.04	1.05	2.39	1.35	0.35

## 第2節 大学教育と仕事で必要な能力との差

大学教育では, 仕事で必要な能力をどの程度育成できているのだろうか, 仕事で必要な能力と大学在学時に獲得した能力の差から検討してみたい(図表24)。

仕事で必要な能力と大学での獲得能力の差が最も大きいのは, 「知識を横断的に活用する力」(0.99), 「新たなアイデアや解決策を見つけ出す力」(0.96), 「取引先や顧客などに対するコミュニケーション能力」(0.95), 「プレッシャーの中で活躍する力」(0.92), 「担当業務の課題を発見し, 具体的な解決策を提案する能力」(0.89) など, 学んだ知識や技能を活用し, 学外などの関係者との関わりで育成される能力が在学中に身につけていないことがわかる。これは, 第2章で本学科の学生が, インターンシップ等の就業体験など, 学科で提供する以外の自発的な教育プログラムや学修活動にあまり熱心に取り組んでいないことにも関係してくるものと考えられる。学科でのゼミ活動などにおいて, 少人数の中でのコミュニケーションや教員による教育・指導の効果は一定程度見られるが, それが仕事で必要な能力に結びついているかといえ, そうではないという状況がうかがえる。これは, 学科内で完結するような教育プログラムではなく, 学外関係者と連携し, プレッシャーの中で, 学科で学んだ知識や技能を横断的に活用する, 応用・発展的な科目が3年次以上のカリキュラムに配置されていないというカリキュ

ラム上の問題も影響しているものと考えられる。仕事で必要な能力育成を視野に入れたカリキュラム改正に向けての検討が今後の課題である。

## 第5章 入学時の志向性と大学教育の効用

情報社会学科に入学する学生は、どのような志向性を持って入学してきたのだろうか。また、学科の教育にどの程度満足しているのだろうか。

### 第1節 入学時の志向性

情報社会学科の学生は、どのような入試制度を利用し入学してきたのか。卒年別の傾向を示したのが図表25である。「一般入試」(38.6%)と「推薦入試」(33.3%)を利用して入学している学生が多く見られるが、卒年別に見ると、近年になるほど「推薦入試」の割合が年々減少していることが分かる。

図表25 卒年別入試制度 (%)

	一般入試	センター試験 利用型入試	推薦入試	AO入試	その他(帰国子女入 試・留学生入試など)	計	<i>n</i>
卒業3年まで	39.3	21.4	25.0	12.5	1.8	100.0	56
卒業4-6年	42.4	9.1	33.3	9.1	6.1	100.0	33
卒業7-9年	32.0	12.0	52.0	4.0	0	100.0	25
計	38.6	15.8	33.3	9.6	2.6	100.0	114

次に、入学時の志願状況を見てみたい。本学への志願時に、他の学部・学科等の進学を希望していたかを尋ねた結果を示したのが図表26である。

「本学で卒業した学科・分野が第一志望」であった学生は67.5%と、学びたい学科・分野を第一志望として受験していることがわかるが、「他の学科・分野が第一志望」という不本意入学も約1割強は存在している。「学科・分野に特別なこだわりはなかった」という目的意識が不明確な入学者も一定程度存在しており、「卒後7-9年」が28.0%と最も多かった。近年になるほど、高校訪問等で、推薦入試やAO入試においてオープンキャンパスに参加し、学科カリキュラムの特徴をきちんと理解した上で志願することを強く求めていることを広報してきたことが、少しずつ認知され、反映してのことだろうか。

久留米大学は他の大学に比べ、学費が高くないという特徴を持っているが、在学中、誰が主な学費負担者になっていたのだろうか。在学中の学費をどのように支払ってきたかを複数回答で尋ねた結果を示したのが図表27である。

学費は「主に保護者の負担」が各卒年とも7割強となっているが、「公的な奨学金や教育ローン」を利用している学生も約3割存在している。「本学の学費支援や奨学金」の利用者も卒年

図表26 入学時の志願状況 (%)

	本学で卒業した学科・ 分野が第一志望	他の学科・分野が第一 志望	学科・分野に特別なこ だわりはなかった	計	<i>n</i>
卒業3年まで	67.9	12.5	19.6	100.0	56
卒業4-6年	75.8	18.2	6.1	100.0	33
卒業7-9年	56.0	16.0	28.0	100.0	25
計	67.5	14.9	17.5	100.0	114

図表27 学費負担の状況

(複数回答, %)

	主に保護者の負担	主にアルバイト	公的な奨学金や教育ローン	本学の学費支援や奨学金	その他	計	n
卒業3年まで	76.4	9.1	32.7	14.5	3.6	100.0	55
卒業4-6年	72.7	3.0	21.2	21.2	3.0	100.0	33
卒業7-9年	75.0	12.5	33.3	8.3	0.0	100.0	24

で異なるが、「卒後4-6年」では21.2%もいた。公的、本学などの奨学金を利用する学生を合わせると、「卒業3年まで」は47.2%、「卒後4-6年」は42.4%、「卒後7-9年」では41.6%と約4割以上の学生が奨学金等を利用しており、その利用状況は近年になるほど増加傾向にある。

## 第2節 大学教育の効用

大学教育は、卒業生にどのような効用を与えているのだろうか。在学中の経験がどのくらい重要だったのかを5段階評価（5「とても重要である」～1「全く重要でない」）の平均値で示したのが図表28である。

図表28 大学教育の効用

	就職先を見つける上で	仕事に必要な基礎を身につける上で	仕事に必要な学習を続けていく上で	将来のキャリアを展望する上で	人格を形成していく上で
卒業3年まで	3.87	3.89	3.47	3.81	4.09
標準偏差	1.037	1.076	1.086	.973	.976
n	55	54	55	54	54
卒業4-6年	3.85	3.71	3.58	3.56	4.06
標準偏差	.958	1.088	.936	.960	1.013
n	34	34	33	34	34
卒業7-9年	3.42	3.67	3.63	3.46	3.88
標準偏差	1.501	1.204	1.056	1.179	.992
n	24	24	24	24	24
計	3.77	3.79	3.54	3.66	4.04
標準偏差	1.134	1.102	1.030	1.018	.986
n	113	112	112	112	112

本学科の教育は「人格を形成していく上で」（4.04）が最も効用があったようである。これは卒年を通じて同じ結果を示している。次に効用が高かったのは「仕事に必要な基礎を身につける上で」（3.79）であった。

## 第3節 本学への満足度

情報社会学科で学んだことを卒業生たちはどのように捉えているのだろうか。吉本（2007）では、入学時の進路選択時を振り返って「母校への愛着や評価」を測る設問として仮想的な設問で評価を行っている。そこで、本調査においても「もし仮に高校卒業後の進路選択をやり直せるとすれば、どのような進路を選びますか」と仮想的な設問を行った。その結果を複数回答で示したのが図表29である。

約7割の卒業生が「本学を選ぶ」と回答しているが、「他の四年制大学に進学」が近年になるほど増加傾向にある。「卒後3年まで」では、43.6%が他の四年制大学を希望していた。



図表29 18歳での進路再選択 (複数回答, %)

	本学を選ぶ	他の四年制 大学に進学	専門学校に 進学	短期大学に 進学	就職、自営など 仕事をしたい	その他	計	n
卒業3年まで	69.1	43.6	14.5	0	5.5	0	100.0	55
卒業4-6年	73.5	26.5	5.9	0	2.9	2.9	100.0	34
卒業7-9年	70.8	29.2	33.3	4.2	8.3	0	100.0	24

また、「卒業7-9年」では、「専門学校に進学」を希望していた学生が33.3%と、「他の4年制大学に進学」の29.2%よりも4.1ポイント高かった。「卒業7-9年」の頃は、本学科と専門学校とが進路選択で比較されていたのかもしれないが、「卒後3年まで」の近年になると、他の四年制大学と本学が進路選択で比較対象となっているようである。

18歳での進路再選択の志望状況は、入試においても、また本学科の高校サイドからの評価を知る上で、さらに検討が必要である。

卒業後の学生間の交流はどのような状況なのだろうか。同窓生との交流頻度を示したのが図表30である。「年に1回程度」が34.0%と最も多いが、「月に1回程度」(29.6%)、「頻繁にある」(21.3%)と卒業後も学生間での交流が続いていることが分かる。「卒後7-9年」になると、交流の頻度は下がってくるが、SNSなどの影響なのか、「卒業4-6年」までの20代では、卒業生同士の交流があまり途絶えていないことがうかがえる。

図表30 同窓生との交流頻度 (%)

	1 全くない	2 ごくまれに	3 年に1回程度	4 月に1回程度	5 頻繁にある	計	n
卒業3年まで	4.2	8.3	31.3	37.5	18.8	100.0	48
卒業4-6年	0.0	8.3	37.5	20.8	33.3	100.0	24
卒業7-9年	13.6	27.3	36.4	9.1	13.6	100.0	22
計	5.3	12.8	34.0	26.6	21.3	100.0	94

最後に「総合的に振り返って」本学の満足度を尋ねたところ、図表31のような結果が得られた。5段階評価の「5とても満足している」と「4」を合わせると、全体で78.9%と高い満足度を示していることがわかる。卒年別に見ても「卒後3年まで」が83.7%、「卒業4-6年」が70.8%、「卒業7-9年」が77.3%であった。「卒業3年まで」は満足の割合が8割を超え最も高かったが、「とても不満である」+「2」の不満と回答した卒業生も6.1%と他の卒年に比べて高かった。「卒業3年まで」の満足度は、中レベルが最も少ないという特徴が見られた。

図表31 学科への満足度 (%)

	1 とても不 満である	2	3	4	5 とても満 足している	計	n
卒業3年まで	2.0	4.1	10.2	42.9	40.8	100.0	49
卒業4-6年	0.0	0.0	29.2	33.3	37.5	100.0	24
卒業7-9年	0.0	4.5	18.2	40.9	36.4	100.0	22
計	1.1	3.2	16.8	40.0	38.9	100.0	95

## 第6章 まとめと今後の課題

### 第1節 主な知見

卒業生調査の結果から、情報社会学科の卒業生の特徴は以下のとおりである。

- 1) 情報社会学科に入学する学生は、中学時代の成績は「中位」もしくは「上位」の学力を持ち、高校時代は「普通科」の教育を受けた学生が多い。
- 2) 学生のエンゲージメントとしては、在学時、授業には真面目に出席しているが、授業外での学習はほとんど行っていなかった。  
学科の教育・指導で充実していたと評価しているものは、「専門の授業」や「卒業論文」、「ゼミ活動」であった。また、自分が熱心に取り組んだ活動も「卒業論文」や「専門の授業」、「ゼミ活動」であった。
- 3) 卒業後の進路は、約9割が就職をしており、約8割が正規雇用として就業していた。その中で、初職を継続している者は約6割であった。
- 4) 在学時に獲得した能力では「PCを活用する能力」であるが、現在の仕事で必要とされている能力は、知識や技能ではなく「基礎的・社会的な技能」や「統合的な学習知識と創造的な思考力」などの能力であった。これらの能力は在学時には獲得できていないという課題も明らかになった。
- 5) 入学時の志願状況は、学科・分野が第一志望の者が約7割であり、学びたい意識を持って入学していることが分かる。また、大学教育での効用としては、「人格を形成する上で」重要だったと考えているようである。総合的な学科への満足度は78.9%とほとんどの卒業生が学科教育に満足していた。

## 第2節 今後の課題

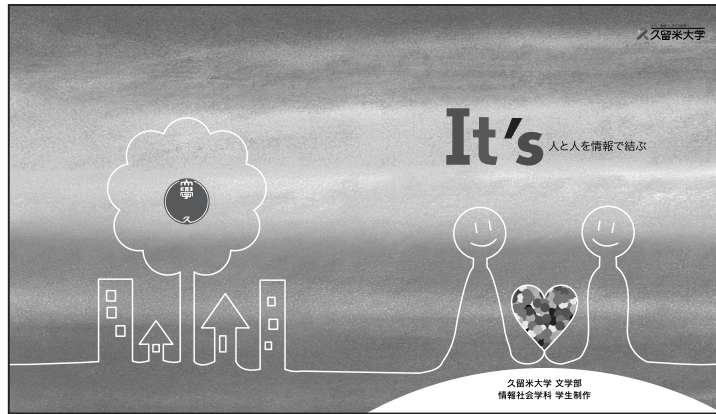
卒業生調査の結果から、学科の教育に満足している卒業生は多いものの、仕事に必要な能力育成のために知識や技術を横断的に活用し、実践する応用科目が不足しているという課題が浮かび上がった。統合的な学習知識を育成する教育方法としてアクティブラーニングが注目されているが、学科独自の教育モデルをカリキュラムとして体系化していくためには、今後、カリキュラムツリーの整備とともに、デュプロマポリシーに基づいたルーブリックの作成も検討課題となってくる。

また、本調査を実施したことで、卒業生と新たな交流の機会というシナジー効果も生まれた。その成果として、2014・2015年度の文学部中央研究費の助成を受け、学生の学生による学生のためのキャリアガイドブック「It's vol.2」を刊行することができた(図表32)。

「It's vol.1」制作の際は、産業界で活躍する卒業生を見つけ、コンタクトを取るまでにかかなりの時間を要したが、卒業生調査の回答項目の中に「It's vol.2」制作の告知と取材協力の可否を回答してもらったところ、多くの卒業生から協力情報を得ることができた。それにより、前号の約半分の制作期間でvol.2を刊行することができた。「It's」制作のプロジェクトは、在学学生がゼミの先輩の職場を訪問し、在学時の学びが現在の仕事にどのように活かされているのか、また卒業生の先輩から在学学生へのメッセージをインタビュー形式で行い、記事にまとめ制作するというプロジェクト型のPBLであり、アクティブラーニングである。学科の学びを実践的に活かすことが実感できる機会が得られることで、学科の良さを再認識した学生も多く見られた。

このように、在学学生と卒業生が交流することができる機会の提供や、卒業生が学科教育のサポーターとなるような仕組みづくりも今後の課題である。

図表32 It's vol.2



## 【注】

- 1) 学生制作によるブックレットである「It's」というタイトルは『久留米大学文学部情報社会学科 It's vol.1』の編集を担当した学生スタッフによって作られた造語である。「It's」には2つの意味がかけてある。1つは「IS」という造語である。これは情報社会学科 (Information Sociology) の頭文字を表している。2つは英単語の「It」である。「It」の意味には、「それ」という意味によってさまざまなことを指すだけでなく、名詞の意味には「望ましい手腕、大切な瞬間」という意味もある。「情報社会学科で望ましい手腕をみにつけてほしい、大切な瞬間を過ごして欲しい」という思いがタイトルに込められている。なお、vol.1とvol.2は、久留米大学 web サイト、情報社会学科のページ内の e-book 内に電子書籍として掲載している。
- 2) AR (Augmented Reality: 拡張現実アプリ) は、2014年7月に「プロジェクトAR」として、学生が主体となってオープンキャンパスの運営を行うプロジェクトへと展開した。「プロジェクトAR」は、当時の2回生有志の学生が主体となってオープンキャンパスを運営するプロジェクトである。ARを用いたクイズ形式のウォークラリー、ノートやしおりなどのオリジナル文具の開発を行い、オープンキャンパスの来場者に配布した。

なお、この「プロジェクトAR」は、2014年度文学部中央研究費の助成を受けての成果の一部である。

## 【参考文献】

- ・ 情報社会学科 e-book <http://www.ebookbinder.net/isoc/> (2016年3月25日閲覧)
- ・ 久留米大学文学部情報社会学科 (2013)『久留米大学文学部情報社会学科 It's vol.1』
- ・ 久留米大学文学部情報社会学科 (2015)『久留米大学文学部情報社会学科 It's vol.2』
- ・ 吉本圭一 (2007)「卒業生を通じた『教育の成果』の点検・評価方法の研究」大学評価・学位授与機構『大学評価・学位研究』第5号, 75-107頁
- ・ 吉本圭一編 (2016)『大学教育における職業統合的学習の社会的効用 — IR 枠組による「大学の学習成果と卒業生のキャリア形成に関する調査」報告書 — 』, 九州大学「高等教育と学位・資格研究会」ワーキングペーパーシリーズ No.3
- ・ 中央職業能力開発協会「職業能力評価基準」  
<https://www.hyokka.javada.or.jp/> (2016年3月25日閲覧)

**【謝辞】**

卒業生調査の実施に際しては、文学部同窓会の多大な協力をいただいた。

また、本学科の教育改善のために web アンケート調査にご協力いただいた卒業生の皆様に、この場を借りて御礼申し上げたい。

**【付記】**

1. 卒業生調査の実施に関しては、2013年度文学部中央研究費の助成を、学生制作のプロジェクト「It's vol.2」は2014, 2015年度文学部中央研究費の助成による成果の一部である。
2. 本研究はJSPS 科研費(25245077)(23330246)の研究成果の一部である。